5　熊本県出土人物埴輪にみる製作方法

前田　真由子

はじめに

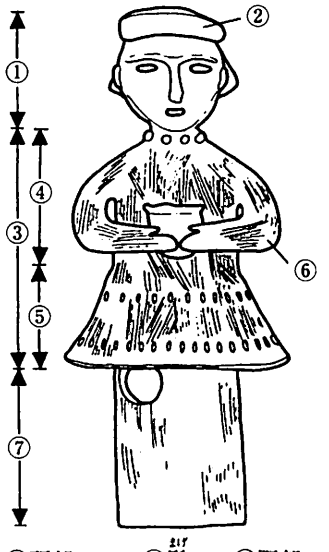
人物埴輪の登場は形象埴輪のなかでもっとも遅く、その初現は5世紀中葉の大阪府大仙古墳から出土した巫女をかたどった埴輪であると考えられている。人物埴輪は、出現時期が遅いにもかかわらず、その製作方法は出現後、急速に全国に伝播し、家形埴輪にかわり埴輪祭祀でも中心的役割を果たすようになる。つまり、人物埴輪の出現は、埴輪祭祀の形態を大きく変化させたと考えられる。

このように、重要視された人物埴輪は、特に東日本を中心に盛行する。一方、熊本県内では、カミノハナ1号墳を含め19基の古墳から人物埴輪片が出土している。熊本県出土例の場合、各古墳から出土した人物埴輪片のほとんどが小片であり、全形をうかがえるような資料はきわめて少ない。また、埴輪祭祀について言及できるような群構造をもった良好な一括資料もみられない。そのため、熊本県出土人物埴輪の検討から埴輪の配列状況などについて検討を加えることは難しい。しかし、破片の観察から製作方法について若干の検討を加えることは可能である。そこで、本論では、人物埴輪の製作方法に注目しながら、熊本県出土人物埴輪にみられる製作方法の特徴について言及していきたい。

1　人物埴輪製作方法に関する研究史

人物埴輪は、職掌により多種多様に表現される。そのため、人物埴輪研究は群構造の検討から埴輪祭祀等について言及するものが多い（若狭2002, 塚田2007ほか）。また、人物埴輪が盛行する関東地方を中心に研究が進められているという特徴がある。このような研究の傾向がある人物埴輪であるが、その製作方法について検討を加えた研究も少なからず存在する。

人物埴輪の製作方法についてはじめて見解を示したのは小林行雄である。小林は、「円筒を母体として細部を付加してゆく方法」（小林1957：p. 222）が人物埴輪や形象埴輪の製作に多くみられると指摘し、さらに、人物埴輪は、①脚下の台製作、②下半身・上半身・頭部製作、③手付加といった手順で製作されるとした（小林1957）。また、この時に人物埴輪の作風の違いは時間差を表していると指摘している。この小林の指摘以後、人物埴輪研究は配列や埴輪祭祀の意義追求に主眼がおかれ、製作方法について言及されることはほとんどなされなかった。



①頭部　②髷（まげ）　③胴部
④上半身部　⑤下半身部（衣裾（ころもすそ））
⑥腕部　⑦基部

図1　人物埴輪各部名称

しかし、そのような中にあって近年、製作方法について言及した研究も散見されるようになってきている。2002年には、塚田良道が人物埴輪配列のゾーンから女子、男子全身、男子半身それぞれに型式分類を行った（塚田2002）。2004年には、車崎正彦が人物埴輪の型式は、形式や地域ごとに少し異なることを指摘した（車崎2004）。また、車崎は、人物埴輪の頭部は球形から円筒形に、腕は中空から中実に、髷表現は折り返した粘土板から扁平粘土板へ変化するとしている。さらに、車崎は「全

表１　熊本県出土人物埴輪地名表

No	古墳名	所在地	墳形：墳長（m）	石室構造	人物埴輪	その他形象埴輪	円筒埴輪編年	備考
1	稲荷山古墳	玉名市繁根木	前方後円墳：110		衣裾、基部	家	Ⅳ	
2	伝左山古墳	玉名市繁根木	円墳：35	横穴式石室	○	家	Ⅳ	
3	フタツカサン古墳	菊池市木柑子	前方後円墳：41.8		○			
4	蛇塚古墳	菊池市七条町	前方後円墳		○？	盾？		
5	京塚古墳	玉名郡和水町江田	円墳：22	舟形石棺	胴部、腕部	獣脚ほか	Ⅳ	
6	虚空蔵塚古墳	玉名郡和水町江田	前方後円墳：44.5		頭部		Ⅳ	
7	塚坊主古墳	玉名郡和水町瀬川	前方後円墳：43.4	横穴式石室	胴部、腕部	鳥、獣脚	Ⅳ	
8	椿山古墳	玉名郡和水町瀬川	前方後円墳？		胴部	家、鳥	Ⅳ	須恵質の埴輪あり
9	岩原双子塚古墳	山鹿市鹿央町	前方後円墳：102		○		Ⅳ	
10	チブサン古墳	山鹿市城	前方後円墳：44	横穴式石室	○	盾	Ⅴ	
11	臼塚古墳	山鹿市石	円墳：28.6	横穴式石室	○		Ⅴ	
12	中村双子塚古墳	山鹿市中	前方後円墳：60～70		○	鳥、馬	Ⅴ	
13	高熊古墳	鹿本郡植木町古閑	前方後円墳：61.5	舟形石棺？	腕部、基部	家ほか	Ⅳ	
14	国越古墳	宇城市不知火町	前方後円墳：62	横穴式石室	頭部、腕部、胴部、脚部	家、蓋、大刀、馬ほか	Ⅴ	
15	道免古墳	宇城市不知火町	円墳		○			
16	カミノハナ1号墳	上天草市松島町	円墳：13	横穴式石室	頭部、首部、腕部、衣裾	鳥ほか	Ⅳ	
17	中ノ城古墳	八代郡氷川町野津	前方後円墳：102	横穴式石室	頭部、腕部、胴部、基部	家、靫、馬ほか	Ⅴ	
18	端ノ城古墳	八代郡氷川町野津	前方後円墳：66.8	家形石棺？	頭部、基部	家、馬、鶏ほか	Ⅴ	
19	八代大塚古墳	八代市上片町	前方後円墳：55.7	横穴式石室？	頭部、腕部、衣？	家、短甲ほか	Ⅴ	

アミカケは今回検討対象とした資料が出土した古墳

身像と半身像の違いは表現方法の相違というだけではなく、造形方法の違いでもある」（車崎2004：p.343）と指摘し、半身像の円筒形の台の上に胴をのせて製作する方法は、いわば伝統的な製作方法であると考えている。また、2008年には、日高慎が近畿地方出土人物埴輪にみられる共通事項を抽出し、その特徴をもとに西日本や東日本出土の人物埴輪について検討を加えている。この論文のなかで、日高は東海地域から西日本にかけての地域は近畿地方の人物埴輪と非常に似た特徴をもつのに対し、関東地方以北出土の人物埴輪は近畿地方の人物埴輪とは積極的には結び付けられないとした（日高2008）。

以上のような人物埴輪の製作方法について言及した研究を参考にしながら、以下、熊本県内出土人物埴輪の製作方法について検討を加えていきたい。

2　熊本県出土人物埴輪にみる製作方法

熊本県出土人物埴輪は先にも触れたように大半が破片資料であり、全形が復元された資料はない。そのため、本論では頭部・胴部・腕部に分け、それぞれの製作方法について検討を加えていくこととする。対象資料は、比較的残存状況がよく、製作方法が検討可能な京塚古墳（和水町）、虚空蔵塚古墳（同）、塚坊主古墳（同）、カミノハナ１号墳（上天草市）、中ノ城古墳（氷川町）、端ノ城古墳

(同)、八代大塚古墳（八代市）出土の人物埴輪片とする。

（1）頭部（図2，表2）

虚空蔵塚古墳（図２－１）　虚空蔵塚古墳からは巫女の頭部が良好な状態で出土している。その製作方法は、まず、幅約４cm、厚さ約２cmの粘土帯を巻き上げることにより外形を成形する。この時、頭部正面はほぼ直線的に巻き上げているのに対し、後頭部側は外に張り出し丸みを持つように粘土を巻き上げている。これは、頭部外形成形の時点で、人物埴輪の正面を意識して製作していた可能性が考えられる。なお、頭部外形成形段階では頭頂部は閉塞しない。次に、顎や鼻、耳など顔面細部を粘土を貼り付けることにより成形する。つまり、粘土で肉付けをすることにより頭部輪郭を成形している。このように、粘土を貼り付けることによって頭部輪郭を成形する方法を『肉付け法』と呼ぶこととする。また、頭部外形成形段階で開放したままとなっていた頭頂部は、髷をのせることによって閉塞する。この時、頭頂部にはヘラ状工具で斜格子状に刻み目を施し、頭頂部と髷がより接着しやすいように工夫が施されている。そして最後に、刀子で口や目を切り抜き、棒状工具で耳孔を穿孔し頭部は完成する。

カミノハナ１号墳（図２－２・３）　カミノハナ１号墳からは、左右両耳周辺の破片が２片出土している。いずれも小破片であるため、頭部全体の製作方法について検討を加えることはできない。しかし、頭部は幅約３cm、厚さ約１cmの粘土帯を巻き上げることにより成形したと考えられる。なお、耳部分は、まず粘土を貼り付けて耳たぶを表現し、次に刀子で耳孔を切り抜き成形している。

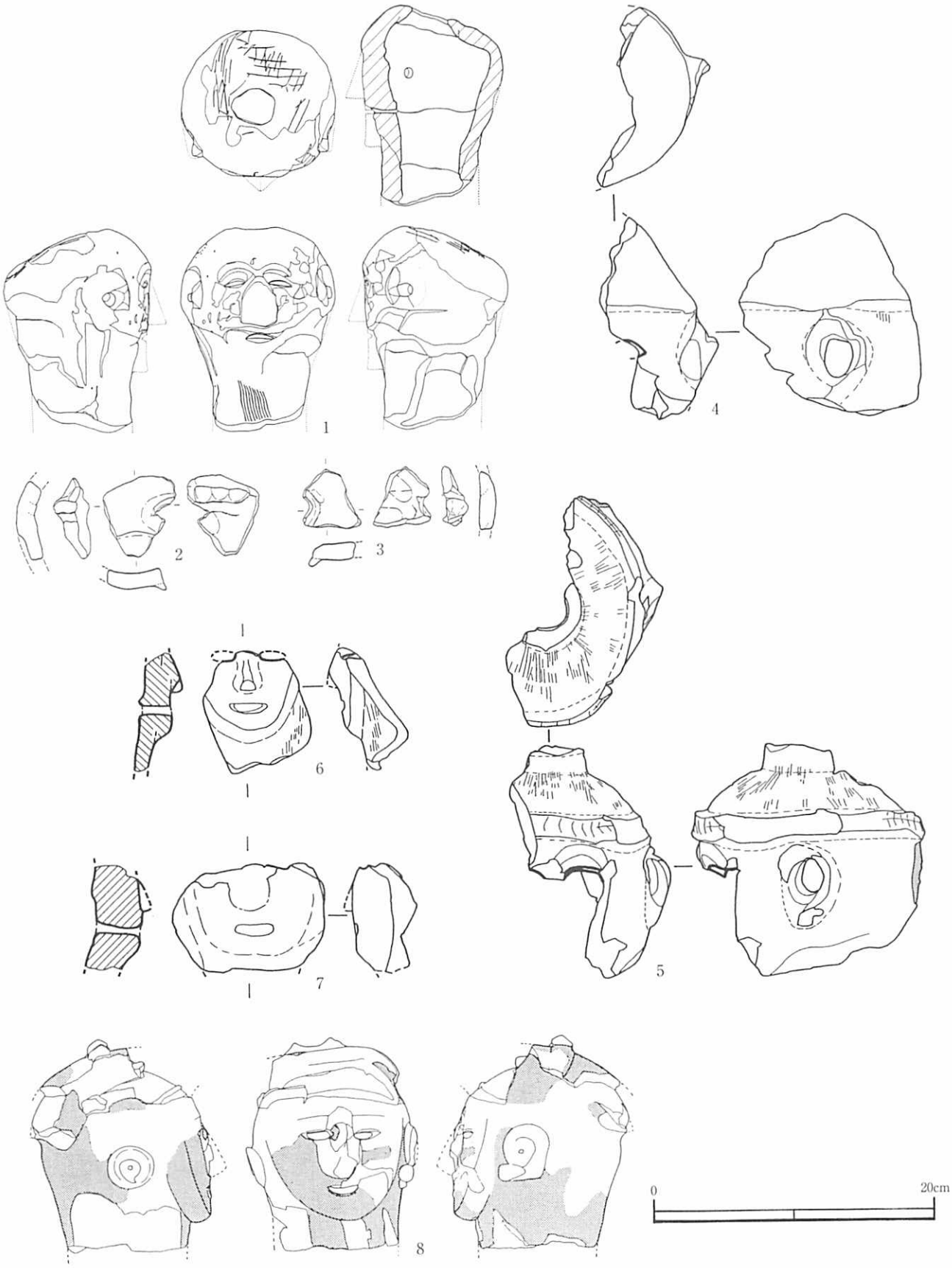
中ノ城古墳（図２－４・５・６）　中ノ城古墳からは大小２タイプの人物頭部片が出土している。ここでは、便宜上大きい頭部を持つ方（４・５）をＡタイプ、小さい頭部を持つ方（６）をＢタイプとし、Ａ・Ｂそれぞれに製作方法をみていく。

まず、Ａタイプの頭部は、厚さ約２cmの粘土帯を巻き上げることにより外形を成形する。次に、頭部内面から粘土を押し出すことによって頭部輪郭を完成させる。そのため、頭部は全体的に球形に近い形をしている。このように、内面から押し出すことによって頭部輪郭を成形する方法を『押し出し法』と呼ぶこととする。その後、粘土を貼り付けて鉢巻や耳を成形し、最後に目や耳を刀子で切り抜き頭部は完成する。このＡタイプの方法を用いて製作された人物埴輪の頭部は大きくどっしりとした印象をあたえる。なお、頭頂部は閉塞しない。

次にＢタイプの頭部は、厚さ約１cmの粘土帯を巻き上げることにより頭部外形が成形されている。次に、肉付け法を用いて頭部輪郭を完成させる。そして最後に、刀子で口や目を切り抜き頭部は完成する。このＢタイプの方法を用いて製作された人物埴輪の頭部は小さく、華奢な印象をあたえる

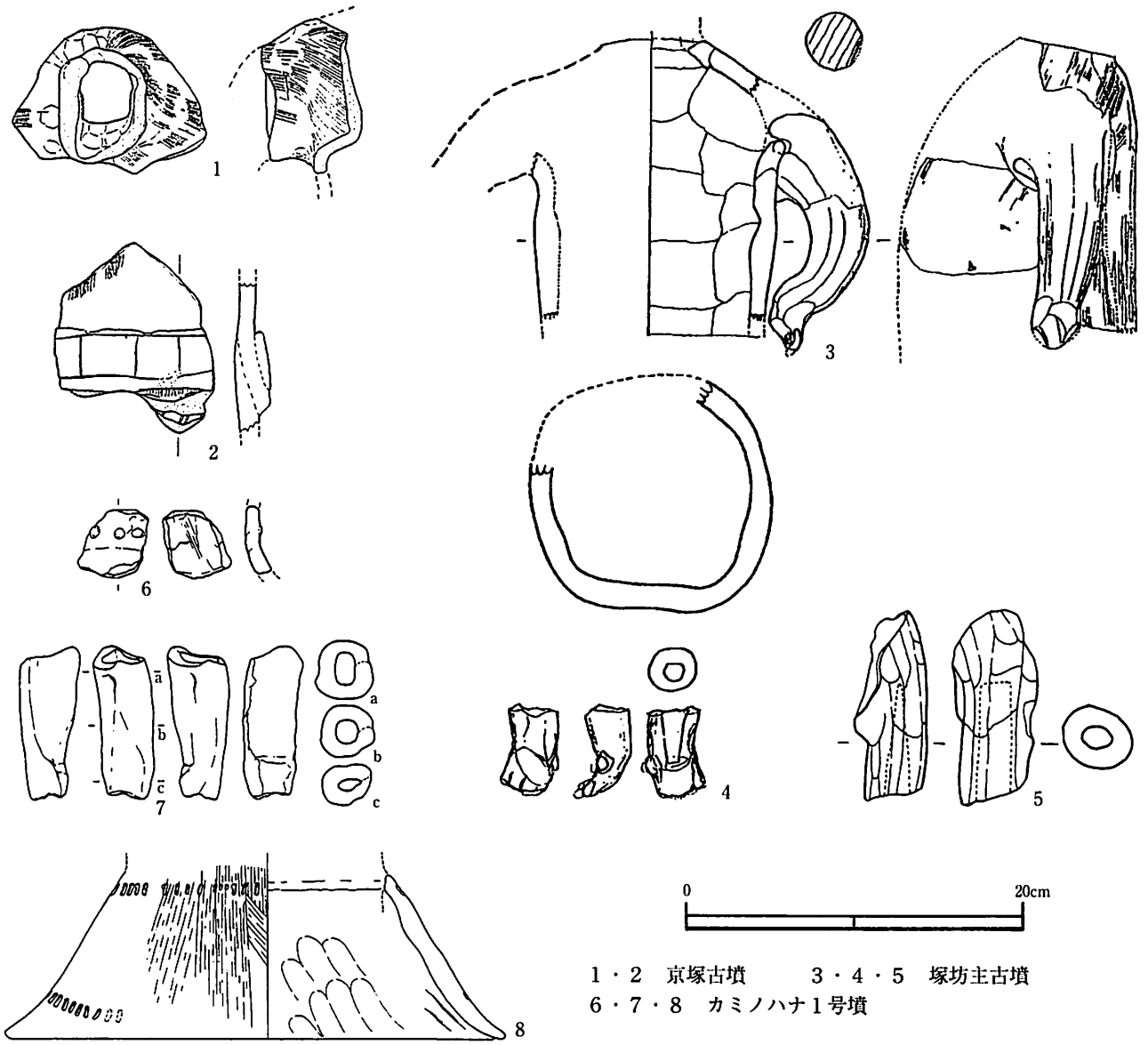
端ノ城古墳（図２－７）　端ノ城古墳からは口周辺の破片が出土している。その製作方法は、まず、厚さ約３cmの粘土帯を巻き上げることにより頭部外形を成形する。次に、押し出し法を用いて頭部輪郭を完成させる。最後に、鼻をナデ付け、刀子で口や目を切り抜き頭部は完成する。

八代大塚古墳（図２－８）　八代大塚古墳からは巫女の頭部が良好な状態で出土している。その製作方法は、まず、幅約３cm、厚さ約１cmの粘土帯を巻き上げることにより頭部外形を成形する。頭部外形成形段階では、頭頂部は閉塞しない。次に、肉付け法を用い頭部輪郭を成形し、鼻、耳となる粘土を貼り付け、髷をのせることによって頭頂部を閉塞する。そして最後に刀子で口や目を刀子で切り抜き、棒状工具で耳孔を穿孔し頭部は完成する。ただ、八代大塚古墳出土人物埴輪頭部の場合、耳孔は貫通しない。



1　虚空蔵塚古墳　　2・3　カミノハナ1号墳　　4・5・6　中ノ城古墳
7　端ノ城古墳　　8　八代大塚古墳

図2　熊本県出土人物埴輪（頭部）



1・2　京塚古墳　　3・4・5　塚坊主古墳
6・7・8　カミノハナ1号墳

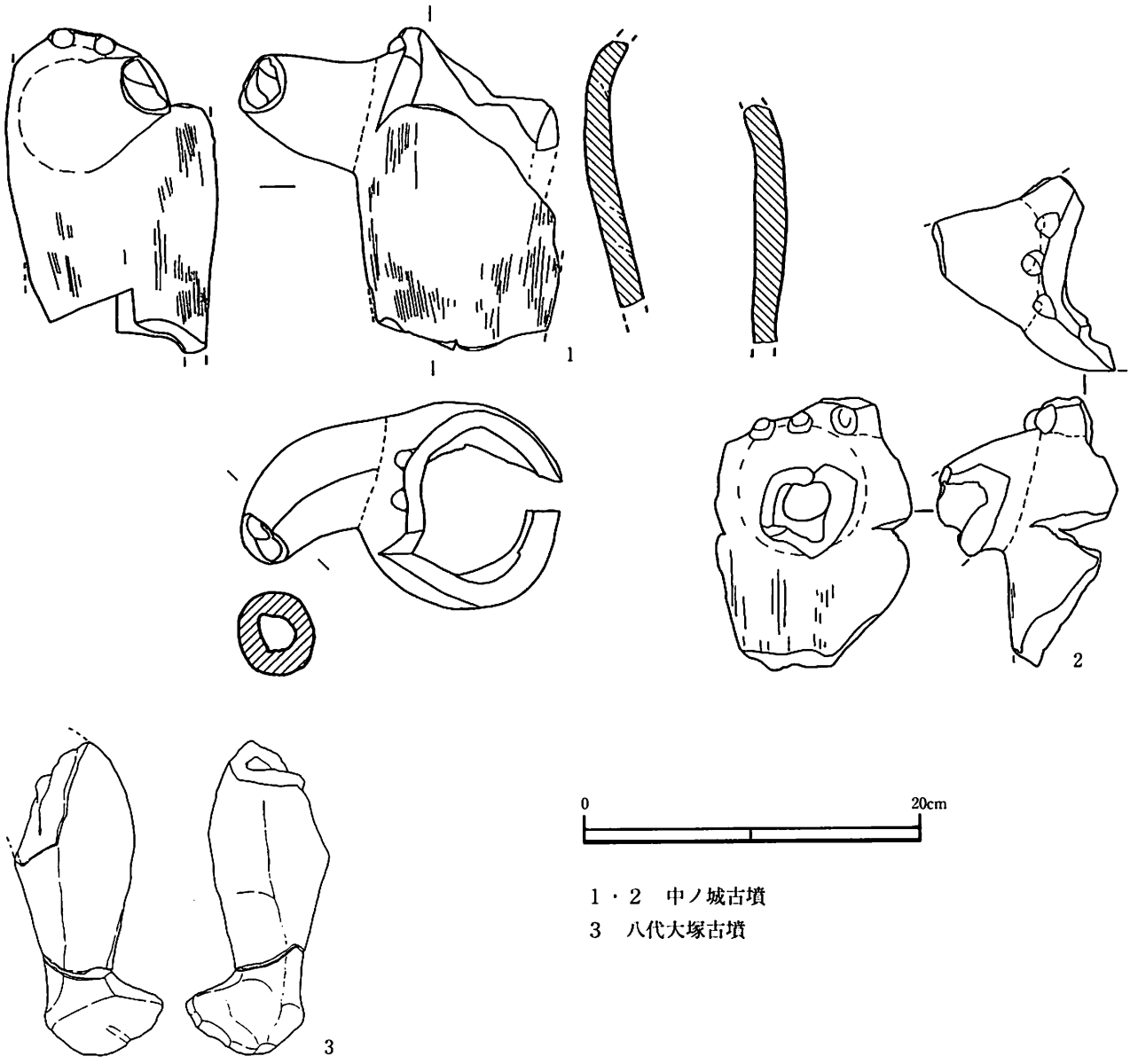
図3　熊本県出土人物埴輪（胴部・腕部）（1）

（2）胴部（図3・4，表3）

京塚古墳（図3－1・2）　京塚古墳からは腰部付近（2）と右肩付近（1）の破片が出土している。その製作方法は、まず、厚さ約1cmの粘土帯を巻き上げることにより下半身部を成形する。次に、衣裾を下半身部に接続する。そして最後に、衣裾に続けて上半身部を成形する。ただし、腕部を接続する部分は、上半身部成形段階では円形に開放した状態になっている。最後に、幅約5cmの粘土帯を腰部に貼り付け帯を表現し胴部は完成する。

塚坊主古墳（図3－3）　塚坊主古墳からは、上半身部から左腕にかけての破片が出土している。その製作方法は、まず、幅約4cm、厚さ約1cmの粘土帯を巻き上げることにより胴部外形を成形する。下半身部や衣裾との接続法は不明である。衣服表現はみられない。また、腕部が接続する部分は、胴部成形段階では円形に開放した状態になっている。

カミノハナ1号墳（図3－6・8）　カミノハナ1号墳からは首部（6）と衣裾（8）の破片が出土している。胴部の製作方法は不明であるが、衣裾片上部の剥離状態の観察より、先に下半身部か



1・2　中ノ城古墳
3　八代大塚古墳

図４　熊本県出土人物埴輪（胴部・腕部）（２）

ら上半身部まで一気に成形したのちに、別に成形していた衣裾を胴部に接続したと考えられる。なお、衣裾は内面のユビオサエ痕から、厚さ約１cmの粘土帯をラッパ開きに巻き上げて成形したと考えられる。衣裾外面にはハケ調整が施され、２列の刺突文によってなんらかの衣服表現がなされている。首部には径約0.7cmの粘土粒を貼り付けることによりネックレスが表現されている。

中ノ城古墳（図４－１・２）　中ノ城古墳からは上半身部から右肩にかけての破片が出土している。上半身部は、幅約２～５cm、厚さ約1.5cmの粘土帯を巻き上げることにより成形している。上半身部と下半身部や衣裾との接続状況は不明である。この胴部片も他古墳出土人物埴輪片同様、腕部が接続する部分は、胴部成形段階では円形に開放した状態になっている。首部には径約１cmの粘土粒を貼り付けることによりネックレスが表現されている。このような方法を用いて製作された胴部は色調や胎土、粘土の厚さなどから、先にあげたＢタイプの人物埴輪頭部と同一個体もしくは同一系統工人集団によって製作されたと考えられる。

（3）腕部（図３・4，表４）

京塚古墳（図３－１）　京塚古墳からは肩から上腕部にかけての破片が出土している。腕部は、厚さ約１cmの粘土板１枚を丸め成形している。そのため、腕内部は中空となっている。このように１枚の粘土板を丸めて腕部を成形する方法は『円筒中空技法』と呼ばれる（塚田2002）。成形した腕部は胴部成形段階で円形に開放した状態となっていた部分に接続される。

塚坊主古墳（図３－３・４・５）　塚坊主古墳からは肩から上腕部にかけての破片が出土している。腕部は、棒状の芯に粘土を巻きつけ成形している。そのため、１枚の粘土板を丸めて成形した場合とは異なり腕部内面断面形が正円に近い形をしている。さらに、腕部内面には棒状芯をぬきとったと思われる痕跡が残る。このように、棒状芯に粘土を巻きつけて腕部を成形する方法は『棒芯中空技法』と呼ばれる（塚田2002）[1]。

カミノハナ１号墳（図３－７）　カミノハナ１号墳からは肘から手先付近の破片が出土している。腕部は、幅６～８cm、厚さ約１cmの粘土板を用い円筒中空技法によって成形されている。また、カミノハナ１号墳出土の人物埴輪腕部は、手先まで中空に製作されていることが注目される[2]。なお、腕輪などのアクセサリー表現はみられない。

中ノ城古墳（図４－１・２）　中ノ城古墳からは手先と肩から肘にかけての破片が数片出土している。手先は、腕部先端に粘土塊を接続することにより成形している。そのため、手先内部は中実である。ただし、破片の観察から手先以外の腕部分は円筒中空技法もしくは棒状中空技法を用いて製作されたと考えられる。なお、腕輪などのアクセサリー表現はみられない。このような工程により製作された腕部は、色調や胎土などから先にあげたＡタイプの頭部と同一個体もしくは同一系統の工人集団によって製作されたと考えられる。

また、肩から肘にかけての破片は、幅２～５cm、厚さ約1.5cmの粘土板を用い円筒中空技法によって成形されている。成形した腕部は胴部成形段階で開放した状態となっていた部分に接続される。この方法により製作された腕部は、色調や胎土などから先にあげたＢタイプの頭部と同一個体もしくは同一系統の工人集団によって製作されたと考えられる。

八代大塚古墳（図４－３）　八代大塚古墳からは右腕が出土している[3]。腕部は、厚さ約１cmの粘土板を用い円筒中空技法によって成形されている。手先は、腕部先端に粘土塊を接続することにより成形している。そのため、手先内部は中実である。

3　熊本県出土人物埴輪製作方法にみる諸特徴

（1）熊本県出土人物埴輪の製作方法にみられる共通事項と相違事項（表２～４）

以上、熊本県出土人物埴輪の製作方法を頭部・胴部・腕部にわけて検討を加えてきた。ここでは、これらの検討をふまえ、熊本県出土人物埴輪の製作方法にみられる共通事項と相違事項を抽出してみたい。

頭部（表２）　頭部の製作方法にみられる共通事項は以下の通りである。

①頭部外形は、粘土帯の巻き上げによって成形する。

②巫女の場合、頭頂部は髷をのせることによって閉塞する。

③眉や鼻、耳は粘土を貼り付けることによって表現する。

④目や口は、刀子で切り抜いて表現する。

次に、相違事項は以下の２点である。

①頭部輪郭成形方法

a．肉付け法：頭部外形に粘土を貼り付けることにより輪郭を成形する（虚空蔵塚古墳，中ノ城古墳Bタイプ，八代大塚古墳）。

b．押し出し法：頭部内面から粘土を押し出すことによって輪郭を成形する（中ノ城古墳Aタイプ，端ノ城古墳）。

表2　熊本県出土人物埴輪の製作方法（頭部）

	部位	粘土		外形成形	輪郭成形		調整	閉塞	眉・鼻・耳などの成形	目・口成形	耳穴成形		備考
		幅（cm）	厚さ（cm）		肉付け法	押し出し法					棒状工具	刀子	
虚空蔵塚古墳	巫女頭部	4	2	粘土巻上げ	○		不明	器をのせ閉塞	粘土貼り付け	刀子	○		頭頂部にはヘラ状工具で斜格子状に刻み目をいれている
カミノハナ1号墳	両耳周辺	3	1	－	－		不明	－	粘土貼り付け	－		○	巫女頭部の一部
中ノ城古墳A	頭部	－	2	粘土巻上げ		○	ナデ	×	粘土貼り付け	刀子		○	男子埴輪
中ノ城古墳B	目～口周辺	－	1	粘土巻上げ	○		ナデ	器をのせ閉塞	粘土貼り付け	刀子	－		
端ノ城古墳	目～口周辺	－	3	粘土巻上げ		○	ナデ	－	粘土貼り付け	刀子	－		巫女か？
八代大塚古墳	巫女頭部	3	1	粘土巻上げ	○		ナデ	器をのせ閉塞	粘土貼り付け	刀子	○		

表3　熊本県出土人物埴輪の製作方法（胴部）

	部位	粘土		外形成形	下半身部との連結	腕部との連結	衣裾以外の衣服表現	調整	備考
		幅（cm）	厚さ（cm）						
京塚古墳	右肩腰付近	－	1	粘土巻上げ	下半身に衣裾部分を接続したのち、続けて上半身成形	腕接続部を円形に空けておき、そこに中空の腕部を接続	帯	ハケ	
塚坊主古墳	上半身部～左腕	4	1	粘土巻上げ	－	腕接続部を円形に空けておき、そこに中空の腕部を接続	×	ハケ	胴部断面は不正円形
カミノハナ1号墳	首部衣裾	－	1	粘土巻上げ	衣裾部分は別に作りあとから胴部と接合	－	○ ※衣裾に沿文	ハケ	粘土粒を貼り付けることによってネックレスを表現
中ノ城古墳B	上半身部～右腕	2～5	1.5	粘土巻上げ	－	腕接続部を円形に空けておき、そこに中空の腕部を接続	×	ハケ	粘土粒を貼り付けることによってネックレスを表現

表4　熊本県出土人物埴輪の製作方法（腕部）

	部位	粘土		外形成形	中空／中実		アクセサリー表現	調整	備考
		幅（cm）	厚さ（cm）		腕	手先			
京塚古墳	肩～上腕部	－	1	粘土を丸める	中空	－	－	ハケ	
塚坊主古墳	肩～上腕部	4	1.5	棒に粘土を巻き付ける	中空	中実	－	ハケ	
カミノハナ1号墳	肘～手先付近	6～8	1	粘土を丸める	中空	中空	×	ハケ	
中ノ城古墳A	手先	－	－	粘土を棒状に伸ばす	中実	中実	×	ハケ	頭部Aタイプと同一工人もしくは同一工人集団の可能性あり
中ノ城古墳B	肩～肘	12	1.5	粘土を丸める	中空	－	－	ハケ	頭部・胴部Bタイプと同一工人もしくは同一工人集団の可能性あり
八代大塚古墳	右腕	－	1	粘土を丸める	中空	中実	×	ハケ	

②耳孔表現方法

a．棒状工具を差し込み耳穴を成形する（虚空蔵塚古墳，八代大塚古墳）。

b．刀子で切り抜き耳穴を成形する（カミノハナ１号墳，中ノ城古墳Ａタイプ）。

胴部（表３）　胴部の製作方法にみられる共通事項は以下の通りである。

①胴部外形は粘土巻き上げによって製作し、腕部と接合する部分は円形に開放した状態に残しておく。

②首飾りは粘土粒を貼り付けることにより表現する。

③衣裾以外の衣服はほとんど表現しない。特に、上半身部には衣服表現が認められない。

相違事項は以下の１点である。

①下半身部と上半身部の接続方法

a．胴部を先に成形し、最後に衣裾を接続する（カミノハナ１号墳）。

b．製作した下半身部の上に衣裾を先に接続し、最後に上半身部を成形する（京塚古墳）。

腕部（表４）　腕部の製作方法にみられる共通点は以下の１点である。

①手首などにアクセサリー表現はみられない。

相違事項は以下の通りである。

①腕部成形方法

a．円筒中空技法（京塚古墳，カミノハナ１号墳，中ノ城古墳Ｂタイプ，八代大塚古墳）

b．棒芯中空技法（塚坊主古墳）

②手先の成形方法

a．粘土帯を丸め成形する。内部は中空になる（カミノハナ１号墳）。

b．粘土塊を腕部に接続させて成形する。内部は中実になる（塚坊主古墳，中ノ城古墳Ａタイプ，八代大塚古墳）。

このように、熊本県内出土人物埴輪の製作方法には共通事項と相違事項があることが確認できた。各埴輪片にみられた製作方法に関する共通事項は、熊本県内出土人物埴輪の製作に関わった工人もしくは工人集団が、ある程度の共通認識をもって製作を行っていた可能性を示している。また、相違事項に関しては、時期差や工人もしくは工人集団差などの要因が考えられる。ここで注目したいのは、中ノ城古墳出土の人物埴輪のように、同一古墳から異なる製作方法で作られた人物埴輪が出土している点である。このことは、人物埴輪の製作に関与した工人集団が単一ではなく複数であった可能性を示している。また、各製作方法は、人物埴輪が製作されるあいだ存続する。すなわち、熊本県出土人物埴輪にみられる製作方法の相違は時期差というよりも、工人もしくは工人集団差をあらわしている可能性が高いと考えられる。これら人物埴輪の製作に関わった工人集団の性格や性質、工人集団間の関わり等は今後の検討課題である。

（２）近畿地方出土人物埴輪にみられる製作方法との比較（表５）

近畿地方と九州地方や東北地方では、ほぼ同時期と考えられる初期人物埴輪が確認されている[4]。このことから、近畿地方で登場した人物埴輪の製作方法は、かなり早い段階で各地に伝播したと考えられている（塚田2002：p. 145，車崎2004：p. 342ほか）。また、先の研究史でも触れたように、日高慎は各地出土の人物埴輪の比較から「東海地域から西日本にかけては畿内の人物埴輪と非常に似た特徴を持っている」と指摘[5]している（日高2008：p. 33）。日高は、畿内出土人物埴輪に共通する特徴

表５　近畿地方出土人物埴輪と熊本県出土人物埴輪の諸特徴

	近畿地方	熊本県地方	備　考
①頭部成形法	押し出し法	肉付け法／押し出し法	
②腕部	中　空	中　空	円筒中空技法と棒芯中空技法の差は含まない
③衣服表現	袈裟状衣・襷	衣裾のみ	女子埴輪の場合

として、①球形に作った頭部を内側から押し出してふっくらした顔をつくる、②腕は中空である、③女子埴輪の袈裟状衣と襷、④女子埴輪の島田髷は粘土板を折り曲げて（あるいは重ねて）リアルに表現する、⑤男子埴輪の線刻表現のうち、顎部から目尻にかけて環状に線刻を施すものと、鼻部の左右に翼状に線刻を施すものの５点をあげている。

このように、近畿地方との関連性が指摘される九州地方出土の人物埴輪であるが、熊本県出土人物埴輪もほかの西日本各地出土の人物埴輪同様、近畿地方からの強い影響を受けているのだろうか。以下、日高の指摘をもとに近畿地方と熊本県出土人物埴輪の製作方法を比較してみたい。

まず、①頭部の成形方法である。近畿地方出土の人物埴輪は、球形に作った頭部を内面から押し出すことによって頭部の輪郭を成形する押し出し法によって成形されている。それに対し、熊本県出土の人物埴輪は大半が、大まかに作った頭部外形に粘土を貼り付けて輪郭を成形する肉付け法によって成形されている。

次に、②腕部である。腕部は、近畿地方同様、熊本県出土の人物埴輪も内部が中空に作られており、共通した特徴を有している。ただし、腕部内部が中空になる成形方法には、円筒中空技法と棒芯中空技法の二者があり、どちらの方法で成形されているのかは今後検討の余地がある。

③女子埴輪の袈裟状衣と襷については、熊本県出土人物埴輪は、衣裾以外の衣服表現はほぼ皆無であり、近畿地方出土人物埴輪とは異なる。

なお、④島田髷、⑤男子埴輪顔面に施される線刻については、熊本県出土人物埴輪には比較できる類例が少なく検討を加えられない。

このようにみてくると、熊本県出土人物埴輪にみられる製作方法は、②腕部が中空であること以外、近畿地方出土の人物埴輪とは異なる特徴を有していることがわかる。また、近畿地方と同じ製作方法によって製作されていると考えられる中ノ城古墳出土Ａタイプの人物埴輪頭部はＢタイプの人物埴輪と比べると、かなり大きく作り方も粗雑であり近畿地方の工人というよりは在地工人が作った可能性の方が高い。さらに、カミノハナ１号墳出土の衣裾にみられるように独特の文様を施す個体（図３－８）も存在する。また、熊本県出土人物埴輪の場合、衣裾以外の衣服をほとんど表現しないという特徴がある。このように衣服を表現しないという特徴は、近畿地方というよりも東日本出土の人物埴輪に通じる特徴であると考えられる。

これらのことから、今回検討の対象とした熊本県出土人物埴輪は近畿地方で誕生した人物埴輪の製作方法をそのまま受け入れて製作されたものではないと考えられる。つまり、人物埴輪の存在を知った在地の工人集団が形態を真似ながら、在地色の強い独自の製作方法を用いて人物埴輪を製作していたのではないだろうか。ただし、熊本県内出土の人物埴輪のなかにも、植木町高熊古墳出土例（西嶋編2004）のように近畿地方の影響を強く受けたと考えられる資料も存在していることには注意が必要である。

おわりに

以上、熊本県出土人物埴輪の製作方法について、①県内出土例の比較、②近畿地方出土例との比較を通して検討を加えてきた。資料が少ないため検討が不十分な点も多いが、①の検討より、熊本県出土人物埴輪には共通した製作方法と異なる製作方法の二者が存在することが明らかとなった。また、その製作方法の違いが工人もしくは工人集団差を示している可能性が高いことも示すことができた。

さらに、②の検討からは、熊本県出土人物埴輪は近畿地方とは異なる製作方法を用いて製作されたことも明らかとなった。これらの人物埴輪と近畿地方の影響を色濃く反映している人物埴輪との関係性は今後の検討課題である。今後、対象地域を広げながら製作方法について検討を加え、工人集団のあり方にも言及していきたい。

本論を執筆するにあたり諸機関ならびに諸氏の御高配を賜りました。末筆ながら、感謝いたします。

注

1）「円筒中空技法」「棒芯中空技法」のほかに、塚田は、粘土塊を棒状に伸ばして腕部を成形する「中実技法」も指摘している（塚田2002：p. 77）。

2）人物埴輪の手先は中実に作られていることが多い。

3）八代大塚古墳の報告書では「種々の点からみて左手かと考えられる」と報告されている（東・乙益編1987：p. 38）。しかし、胴部との連結状況や手先の曲がり方、人物埴輪の正面観などを勘案すると右手である可能性が高いと判断した。

4）5世紀中葉の人物埴輪例としては、大阪府大仙古墳、福岡県石人山古墳、福島県天王壇古墳、宮城県念南寺古墳などがあげられる。

5）この指摘を裏付ける資料として、日高は島根県常楽寺古墳、福岡県小正西古墳、宮崎県百足塚古墳などから出土した人物埴輪をあげている。

引用・参考文献

稲村　繁　2002「人物埴輪の世界」ものが語る考古学シリーズ⑥　同成社

今田治代編　1999「野津古墳群Ⅱ」「竜北町文化財調査報告書」第1集　竜北町教育委員会

緒方　勉・森山栄一編　1982「清原古墳群および岩原古墳群の周溝確認調査」「熊本県文化財調査報告書」第55集　熊本県教育委員会

樫田　誠編　1992「矢田野エジリ古墳発掘調査報告書」石川県小松市教育委員会

亀井正道　1995「人物・動物はにわ」「日本の美術」№346　至文堂

菊水町教育委員会編　1980「清原古墳群周隍調査概要」「江田船山古墳」菊水町教育委員会

隈　昭志編　1984「塚坊主古墳」「熊本県文化財調査報告書」第68集　熊本県教育委員会

車崎正彦　2004「人物埴輪・動物埴輪」「考古資料大観」4　弥生・古墳時代　埴輪　小学館：pp. 341－350

桑原憲彰編　1987「京塚古墳」「熊本県文化財調査報告書」第68集　熊本県教育委員会

甲元眞之・岩崎志保・藏冨士寛編　1994「野津古墳群」竜北町教育委員会

小林行雄　1957「埴輪」「世界陶磁全集」1　日本古代編　河出書房新社：pp. 221－230

杉山晋作　2007「人物埴輪の表現・情景そして効果場面」「埴輪の構造と機能」第12回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料　東北・関東前方後円墳研究会：pp. 34－36

田中祐介・吉田和彦編　2000「九州の埴輪　その変遷と地域性－壺形埴輪・円筒埴輪・形象埴輪・石製表飾－」第3回九州前方後円墳研究会資料集　九州前方後円墳研究会

塚田良道　2002「人物埴輪の展開」『考古学研究』第49巻第２号　考古学研究会：pp. 67－87
塚田良道　2007「人物埴輪の構造と意味」『埴輪の構造と機能』第12回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料　東北・関東前方後円墳研究会：pp. 57－68
西嶋剛広編　2004「高熊古墳第１次・第２次調査概要」『考古学研究室報告』第39集　熊本大学文学部考古学研究室
西山由美子　2008『火の君、海を征く！～古墳からみたヤマトと八代～』平成20年度秋季特別展覧会　八代の歴史と文化18　八代市立博物館未来の森ミュージアム
東　光彦・乙益重隆編　1987「八代大塚古墳」『八代市文化財調査報告書』１　八代市教育委員会
日高　慎　2008「人物埴輪の東西比較－論点の抽出－」『埴輪研究会誌』第12号　埴輪研究会：pp. 19－37
山城敏昭編　1997「塚坊主古墳」『熊本県文化財調査報告書』第161集　熊本県教育委員会
米倉秀紀編　1982「カミノハナ古墳群２」『研究室活動報告』14　熊本大学文学部考古学研究室
若狭　徹　2002「人物埴輪様式論」『季刊考古学』第79号　雄山閣：pp. 56－60

挿図出典

図１・表１～５：筆者作成
図２－１：山城編1997、p. 16の第５図
　　４・５・６：今田編1999、p. 93の第60図３・５・６
　　７：今田編1999、p. 77の第47図
　　８：東・乙益編1987、p. 41の第８図１
　　２・３：筆者実測・製図
図３－１・２：桑原編1987、p. 54の第27図№15・16
　　３・４：田中・吉田編2000、p. 253
　　５：山城編1997、p. 28の第12図２
　　６・７・８：筆者実測・製図
図４－１・２：今田編1999、p. 93の第60図10・11
　　３：東・乙益編1987、p. 41の第８図２